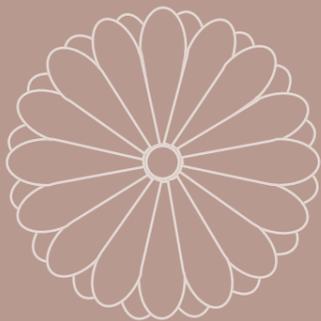




御殯大明神（ごひんだいみょうじん）と呼ばれる安徳天皇の陵墓。陵墓西側は崩れており、断面を見ると写真上部の青丸部分に、石室らしい三段の石組みのこん跡がある。左下の赤丸中心にある小さな柱石は天皇崩御（ほうぎょ）ののち、後追い自決した女官たちの墓といわれている。



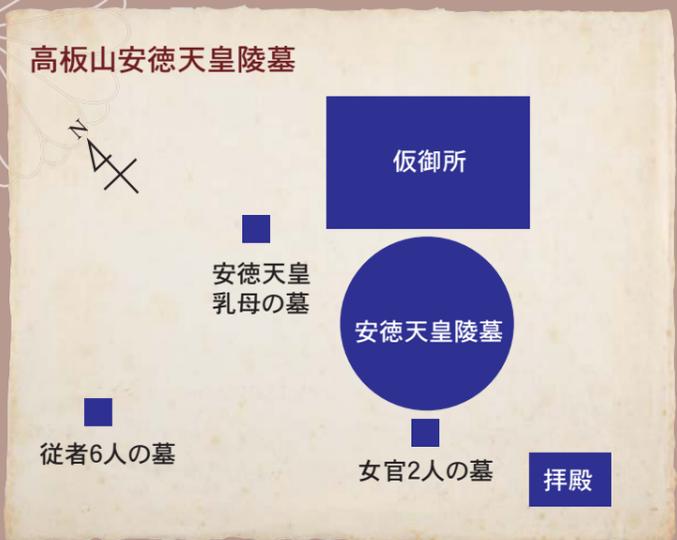
▲安徳天皇が眠るといわれている高板山赤牛（こうのいたやまあかぎゅう）にある陵墓の拝殿。岩の中央に穴がくりぬかれトンネルのようになっている。陵墓の真南にはこのような拝殿があり、陵墓の条件を満たしている。



▲上写真青丸部拡大。



▲陵墓頂上部にあたる上円部。碎石した小石の列が東西方向に十数列見られる。



▲陵墓奥には安徳天皇が過ごしたといわれる仮御所の跡（平地）がある。安徳天皇はこの近くの“沼”という平らな場所で仮住まいした後、完成した仮御所に移ったといわれる。山中で冷たい風が吹くときでも、この沼では風がぴたりと止むという。

# 特集 安徳天皇潜幸伝説

市内の各地に平家や安徳天皇にまつわる話が伝えられています。今回、香美市物部町に伝わる安徳天皇伝説を紹介します。

時は平安末期、平清盛の孫にあたる言仁親王（安徳天皇）が天皇に即位し、ついに念願の外戚となった平清盛も、源氏による各地での蜂起が続く中、その生涯を終えることとなる。

清盛の没後、木曾義仲の侵攻に始まる源氏方の勢いを貴族化した平家の武士らでは、もはや防ぐ術もなく、一門の錦の御旗である幼帝を伴い、西国に向け滅亡の道をたどる旅に出ることとなる。

後白河法皇の院宣を受けた源頼朝の命により、弟義経の軍が討伐に西下し、平家は義経による一の谷の奇襲作戦に惨敗した。さらには安徳天皇の仮宮が置かれる屋島での合戦にて、瀬戸の海に追われた平家一門はついに終焉の時を迎える。

外祖母二位ノ尼に抱かれた安徳天皇は壇ノ浦の海に八歳の生涯を閉じ、平家一門の栄耀華もここに泡と消える。これが、平家物語などに語られる正史である。

しかし、時の戦況やその時代の貴族や武家の習慣、各地に残る伝説等を考究すると安徳天皇の入水説には疑問も残り、壇ノ浦後の帝行幸伝説や、一門の落人の潜行伝説が全国各地に伝えられ、近來その研究も進んできている。その中には極めて高い信憑性を裏付ける口伝や遺品を多く残すものもある。

物部町における伝承もその一つである。地名や逸話のみならず、昔日の実話を彷彿とさせる遺跡や遺品も伝えられ、我々を正史の裏に秘められた世界に誘ってくれる。

古くから物部町の高板山（皇の居た山）の山頂付近には安徳天皇の陵墓があると伝えられ、高板山に登る山道がある地域には奥番・中番4力所・下番・土居番3力所・堂番・東番2力所・西番の合計13力所の番所があり、物々しい警戒態勢が敷かれていたことが想像される。

近年まで、安徳天皇が崩御されたといわれる8月15日に、安丸城八幡宮と高板山の拝殿で、一行の子孫を名乗る人々によって慰霊祭が行われていた。